

---

# 悪夢

篠義

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪夢

### 【Nコード】

N1241Q

### 【作者名】

篠義

### 【あらすじ】

関西弁夫

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまった、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。ははははは。

「やあ、みなとちゃん、今日も可愛いね？」

「ありがとうございますー」

・・・え？ ちょお待てや、なんで、俺、こんな格好してんの？・・・

人間は、夢を見る。自分が夢の中に沈んでいるのと、それを客観的に見ているのと、いろいろ千差万別に見るものだ。たぶん、今、俺は、夢を見ている。だって、俺と思われるヤツが、スクリーンみたいに向こうに見えている。だが、その姿が、異常だ。ミニスカで、首にはリボンで、胸元が見えそうなキャミという、かなり際どい姿で、キャバクラ嬢という設定だ。なのに、俺は男のままだ。他のキャバクラ嬢が、可愛い女の子で、それなのに、俺のことを同様に扱っている。

2

・・・いや、夢やから、ええんか・・・この際や、おねーちゃんの胸でも触ってみようかなー・・・

「今日もキバってや。さあ、仕事やでえー。」

せっかく触れそうだったのに、マネージャーの声で、カワイ子ちゃんたちは、四方に散ってしまった。

場面転換して、俺は、店の奥の事務室の前だ。いきなり、バーンと扉が開いて、そこから現れたのは堀内のおっさんだ。

「なんや、今の話聞いとったんかいな？　しゃーないなあー、売れっ子のみなとちゃんやけど、南港でコンクリート抱いてもらわなあかな。」

・・・うわあー、本物より本物らしいわ、おっさんつつ・・・

堀内のおっさんは、本物のやくざですら、一歩引くぐらいの極道ちっくなおっさんなので、台詞が似合いますぎていた。

「せやけど、ものは相談や。みなとちゃんが、わしの愛人さんになつてくれるんやったら、南港はなしや？　どないや？　好きなもん買おたるし、ええもん食わせたるで？」

・・・あー、この台詞、昔、俺が言われてたヤツやわ。・・・

扉の前から、俺は室内へ引きずり込まれた。そこで、ニヤニヤ笑っているのも、堀内の部下で、やっぱり、極道ちっくなおっさんたちだ。

「くくくくく・・・そんなに泣かんでもええがな。ちよつと気持ちよくなるクスリ、入れたらうな。ああ、ああ、そんなに怖がらんでええ。ちくつとするだけやから。」

・・・うわ、いきなりヤク打つか？　それ、あんまりやないか？　・・・

で、俺が暢気な感想を呟いた瞬間に、ちくつと腕が痛んだ。そして、目の前には、堀内のおっさんの顔がある。どうやら、スクリーンモードから当事者モードにチェンジしたらしい。へへへへ・・・と、やらしそつに笑っている顔が近寄ってくるので、もう、ええ、

早よ、夢から覚めろ、と、俺は起きようとするのだが、うまくいかない。びりつと音がして、キャミが破れた。

・・・え？・・・こんなシーン、俺、お望みやないってええええええ・・・

うわぁーと目を閉じたら、ごんつと衝撃で目が覚めた。ベッドから転がり落ちたらしく、俺は床に転がっている。

「・・・おまえ・・・やめて」 は、まあええわ。せやけど、おっさんつつ、いやや」 は、なんや？」

・・・ん？・・・

声のするほうに振り向いたら、俺の旦那がベッドの上から、じと目で睨んでいた。かなり不機嫌な様子だ。

「なんで、抱き寄せただけで、『おっさん、いやや』とか『やめて』とか言われなあかんのか説明してもらおうか？」

あー、なるほど、実際に触られていたから、生々しかったのか、と、俺は理解した。たぶん、寝る前に読んでいたミステリーの影響で、サスペンスミステリーな夢を見たらしい。

「あのな、夢見ててな。俺、キャバクラ嬢やったんよ。」

「はあ？ おまえ、頭、大丈夫かぁー？ 水都。」

覚えている限りの夢の内容を、旦那にしゃべったら、相手は笑い転げて、「腹イタイっつ。死ぬ、笑い死ぬっつ。」と、酸欠でも



んも論外やろう。」

たぶん、イヤなのだ。出張に行くのも、ここを離れるのも。それで、余計に、そういう夢で印象を悪くしているのだと思う。グッジョブなんか、迷惑なんかよくわからないが、俺の右脳は、そういうことを夢にしたと思われた。

「行かんといたらええねん。」

旦那は、ニカニカ笑って、「当日、おまえ、風邪もしくは腹痛で病欠な。」と、悪知恵を働かす。まあ、それでもええか、と、俺も、「せやな。」と、頷いた。

「せっかくの黄金週間なのに、湿気た夢見んなよ。」

「おまえが、ここから動かれへんようにしとったんじゃっつ。」

どこへ出かけても、人ごみの黄金週間なんてものは、家でのんびりするほうがいい。そういうわけで、我が家では、この休暇は寝暮らし生活になる。だが、それだって限界はあるわけで、そろそろ、散歩ぐらいはしたほうがいい。

「明日から仕事やから、そろそろ、動こうか？ 花月。」

「おう、駅前まで、ミスドでも買いに行こうか。」

「……ミスド？……甘いもんはいらん。」

「ほな、美松の生菓子で、どや？」

「あほ、こどもの日が終わったから、店休みじゃっつ。」

「ほおう、えらい、商売のこと、わかつてはんねんなあ？ 水都はん。ほな、確かめてみようやないの？」

「おう、望むところじゃっつ。休みやつたら、おまえ、今晚、コロツケ作れ。」

「わかった。受けて立つたらあ。その代わり、店、開いてたら、おまえが、茶碗蒸しと天ぷら作れ。」

たわいもない賭け事をして、ふたりして起き上がった。どっちが勝っても、家で手作りであることには違いがない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1241q/>

---

悪夢

2011年1月16日09時13分発行